

# 「三法印 (さんぼういん 三つの真理)」

「三法印」で、お経・偈文などの意味を少しづつ解説してきました。前回は釈迦さまがお悟りを開くに至った「雪山偈」そして「いろは歌」として詠まれて来たというお話をしました。今回は その三法

## 「三法印」

**諸行無常** (むぎょうむじょう)

あらゆる一切のものは無常である

**諸法無我** (むじょうむが)

全てのものはひとりでは存在しえない。すべてのものは縁のおかげで存在する。

**涅槃寂静** (ねはんじやくじょう)

欲望煩悩に縛られた世界から解放されれば、身心は落ち着いていく。

味があるのです。通常の死は他人の死を考へますが自分の死については考へないものです。けれども時々刻々進んでいくのです。その実感を味わうことにはなるのは自分の病気の時でしょう。重い病になったりすると、あつちの病院、こつちの神様とご利益を求めて、あるいは息災延命の現世利益をもとめることになりがちです。

ここに至ってようやく「生者必滅、会者定離」の無常の意を少しは真剣に考へざるを得なくなるのです。「色は匂へど散りぬるを、わが世誰ぞ常ならむ」という「いろは歌」の意味は「美しい花もほどなく散ってゆくように、この世のすべてはうつりかわっ

てゆく」という諸行無常の教えを詠んだものです。ところが、一切は常無く、諸行は無常であるというのは、人の死ぬことだけに止まらず、世の中は絶えず刻々と変化している相であり絶対の事実です。死ぬ人があれば生まれる人もありますし、苦しんで不安のあまり死を考えたとしてもそれは一時のことであるとも示されません。諸行無常とは、すべてのものは移り変わるということですね。

道元禪師が「観無常心は發菩提心なり」と示されておりますのは、「わが命の露よりもはかなきことを悟ったとき、人は永遠の真実を求め、仏心にめざめる」ということです。自分の命の流れ去ることの速さを実感するときには、宇宙の大生命であり、仏の命を宿すこの身を、そして生きる使命と価値を

見いだすべく、求道の心が自然に発ると示されます。今回はここまで、次回は「諸法無我」のお話をいたします。

### 「人生儀礼」と「死者儀礼」

日本人は人生の節目にお寺や神社にお参りして、その日をめでたく迎えることができたことを神仏に感謝し、これからもお守りくださいと願って手を合わせました。この人生事を「人生儀礼」と呼ぶのですが、不思議な事に、生きていくうち儀礼と亡くなつてもよく似ているのです。

たとえば、赤ん坊が生まれると「お七夜」が行われますが、人が亡くなつてからの最初のご法事は初七日です。次に「お食い初め」は百日目ですが、亡き人では「百か日」のご

法事が営まれます。そして、七五三・十三参りの行事は、三回忌・七回忌・十三回忌と対応しています。また、産湯は死者の湯灌と、産着は死に装束と、命名は戒名と対応しています。このことから、私たちの祖先は生と死を別なものとして考へるのではなく、死は新たなスタートであると受けとめていたと思えてなりません。

### 編集後記

全てが「ウマク」いくわけでは無いが、ウマのごとく力強く一年を走り続けられたらいいなあと思ひます。年々歳々花相似たり歳々年年人同じからず一日一日を一生懸命生きたいものです。小坊

# かきみす

正月号

発行所 普門山 林泉寺  
三戸町斗内字 寺牛25  
〇一七九  
二五二八五〇  
啓誠

馬は大 変な働 きな者 馬に見 習って



## お正月を迎えて

年末の慌ただしさの中、今年一年に起った様々な出来事に思いを馳せていると、かすかに聞こえてくる除夜の鐘。年が明け「いのち」が生まれ変わるお正月を迎えました。お正月と言えば、お餅にお雑煮、お節料理、お年玉、初詣、凧揚げ、福袋などなど、いろいろと楽しいことが目白押しです。私もお正月は、お年玉をもらうのが楽しみで、お正月が来る日を屈指で数えています。

富士イ眺めて、  
さア一服  
あゝ ウマいなア  
煙あがつて  
空高く  
心も晴れて、  
よい一年

謹んで平成二十六年甲午の新春を祝し、  
国士昌平、万邦和樂皆さまのご多幸を  
お祈りもうしあげます。  
普門山 林泉寺

平成二十六年元旦



年神さまは家族に一年の健康と幸せをもたらし、くれる神さまです。門松や松飾りもこの年神さまを迎えるためのものです。この年神さまにお供えしたお餅を分け合い、みんなでお供えしたお餅をいただきました。考えてみると、お正月は家族みんなが健康と幸せを願い、新たな気持ちで満ちたときです。

飯原啓誠 合掌

# 落語べっぴん

という番組をNHKで放送しているのを偶然見まして「なんと、落語とお釈迦さまを一緒にするの？」と思わず叫んだのですが、番組が進むにつれて「なるほどな」と、ガッテン、ガッテン」と思いました。ユニークな形態の芸能である落語、独特の展開を遂げてきた仏教のお説教、このふたつは元をたせば実は繋がっているのです。次の「仏馬」という落語を読めばわかると思います。

では、高座へテンツク、テンツクテンツクテンツクテン

檀家回りを終え、お布施をたくさん頂いた坊主の弁長と小坊主の西念。弁長は振舞い酒で、すっかりいい気持ち。一方

西念は檀家からのもらい物をすべて持たされてうんざり。そんな二人が土手にさしかかると、一頭の左耳の所に白い差し毛のある黒い馬が繋がれていて、「なあ、西念、お前の腰紐を貸してみろ」と西念に腰紐を解くよう言いつける。「腰紐を抜きました、で、どうするんですか？」と、弁長は腰紐を取って上げ、その両端に荷物をくくりつけ馬の背中に乗せると、西念にこの馬を寺まで引いて帰れという。西念にすべてを押しつけて、酔いが覚めるまで一眠りしようとする。横になるのだが、すぐ下は川。もし寝ぼけて川に落ちては大変と、今度は自分の腰紐を抜いて一方を木に結んで、そこへしばらくし

て、馬の持ち主であるお百姓。馬がいつの間にかお坊さんに化けているもんだから、びっくり仰天。弁長は馬の持ち主に起こされて、あたふた、早いところ立ち去ればよかったと後悔するが、こうなったら仕方がない、あ弁長「わたしは、あなたに飼っていた馬なのですよ」お百姓「おらの馬の黒がどうして坊さんに化けたんだ？」弁長「実は、わたしは前の世に弁長という坊主だったのですが、身上が悪いのでお釈迦さまの罰をこうむり、この世に馬になって生まれたのです。ご縁があつて飼ってもらいました。難行苦行を積んだおかげで、お釈迦さまのお怒りが解け、元の坊主の体に戻って頂きました」といふ。なんと胡散臭いこの言い訳を信じたお百姓「それは不思議なこともあるものだ。ちょうどよかつた、今日は死んだおふくろの

祥月命日だから、一緒に来てお経の一つも上げてもらいたいもんだ」弁長「よろしゅうございませぬ、どうぞ一緒にお連れ下さい」弁長はお百姓の家へとやって来て、経文を唱えます。そしてそのお札に食事を用意され、お百姓が一人で酒を呑みだすと、弁長も「お釈迦さまが今日だけは酒を許す」と言っており、お百姓は酒を呑み始め、ペロペロに酔い、お百姓の娘に酔を頼んで、手を引く張つたりなどしてお百姓にたしなめられる。またしてもすつかりご機嫌になった弁長が夜遅くに寺に帰ると師匠に「あの馬はどうしたのか」と尋ねられ、「重い荷物を背負つては大変だろうと、もらいました」と言い訳をする。「この寺では馬を飼うことができないので、市で売つてくるように」と言われる。さて、翌朝、弁長が馬を売つて帰るのと行き違い

に、市へやって来たのがお百姓。馬がいなくなつて不自由なので、代わりの馬を探そうときよるきよる辺りを見回すと、どこかで見たような馬が、「あれ、おかしなこともあるものだ、おらの馬にそっくりだ。ああ、あれは黒だ、黒にちげえねえ、左の耳に白い差し毛がある。これがたしかな証拠だ、黒だ、弁長さん、せつおい弁長さん、せつかく人間になつたのに、酒飲んだり、女子をからかったりして、またお釈迦さまに罰当てられて馬になつたんだ」と、馬の耳に口寄せて、大きな声を出すと、うさかつたのか、首を横にぶるんぶるんと振つた。「ハハハハダメだよ。いくらとぼけても、その左の耳の差し毛でわかるだよ」

か、この「仏馬」は、もともと明治から昭和にかけて活躍した二代目談州楼燕枝（だんしゅうろうえんし）という方が、高座にかけて以来、ほとんど演じ手のいなかった演目だそうなんです。それを柳家一門の柳家喬太郎という人が『増補・落語事典』にて発見し、あらずじしか解らなくなつていたものに肉付けをして、再び高座にかけられるようにしたものだそうです。

さて、文頭でもお話をしましたが、仏教と落語の繋がりが、おわかりでしょうか。ちよつと難しいかも知れませんが、「オチ」というのは、「オチ」もしくは「下げ」がよく解りずらいですね。家族皆さんで、こたつに入り、みかんでも食べながら、この「オチ」を語りあつてみてはいかがでしょうか。

お後がよろしいようで。

# 支えあう

安心して、いのちと向きあえますか？

人とは、その場に居合わせ、逃げない、受け止め、引き受けて生きていくこと。どのよ

# 向きあう



『安心立命』。自分が今できることを精一杯やって、天命に身をまかせろ。そこに、『安心』がうまれるのではないのでしょうか。

# 伝える

死病老生。生きることに、死ぬこと、だからこそ、向きあひ、伝え、支えあひ、命を寄せ合つていくのです。

『安心立命』。自分が今できることを精一杯やって、天命に身をまかせろ。そこに、『安心』がうまれるのではないのでしょうか。

甲午は、木性の陽干である「甲（きのえ）」と、夏の十二支「午（うま）」が一つになつて成立している干支です。「午」は大きな炎の質、太陽の質を表します。そして、「甲」は大きな木を表します。

甲午生まれの人のイメージは、真夏に生い茂る樹木、大木のようなイメージです。真夏の樹木が勢いよく枝葉を伸ばしているような純粋さと、他人を疑わない透明な心の持ち主です。

また、人の目を引く、一種の色気も持ち合わせています。至つてオシャレで、独特の個性がファッションなどに表れます。派手な外見のせいかわれ情深い一面には気づかれにくいのですが、甲午の人のふとした一言の中にちよつとした心配りを感じることが出来て初めて、この人の温かみに気がつくのです。

抑えて、自分の心の声に正直に、人の役に立つと動くことを主軸にして行動を起こしていくと、徐々に運勢が開けます。このこと。今年、還暦を迎える六十歳の方々、こういう節目の時こそ、自分を見つめ直してみたいかがでしょうか。

この運勢は、たくさん師の中、ほんの一部です。あくまでたまたま目についたものを載せてみました。これが全てではありませんので、あしからず。

